

令和3年度（2期）一般選抜入学試験問題

国語総合・現代文B

（時間 60分 配点 100点）

受験上の注意事項

- 【1】試験開始の合図があるまで、問題冊子を開いてはいけません。
- 【2】受験票及び机上の受験番号シールに印刷された受験番号及び氏名が間違っていれば、速やかに監督者に知らせなさい。
- 【3】この問題冊子は、本文が20ページあります。
問題冊子の印刷が不鮮明であったり、ページが落丁・乱丁していたり、解答用紙に汚れ等がある場合には、手を挙げて監督者に知らせなさい。
- 【4】机には受験票・筆記用具及び時計等監督者から指示された物以外は置いてはいけません。
- 【5】監督者の指示があるまで退室はできません。
- 【6】解答用紙の解答科目欄の「国語」にマークしなさい。マークされていないか、複数の科目にマークされている場合は、採点できないことがあります。
- 【7】解答用紙については、特に次の点に留意しなさい。
 - ① マークには必ず黒鉛筆（HB）を使用しなさい。
 - ② 解答は、解答用紙の問題番号に対応した解答欄にマークしなさい。例えば、第2問の

ア

 と表示のある問いに対して ③ と解答する場合は、次の例のように問題番号

2

 の解答欄アの ③ にマークしなさい。

例

2	解 答 欄									
	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9
ア	①	②	③	④	⑤	⑥	⑦	⑧	⑨	

- ③ 折り曲げたり、汚したりしてはいけません。
 - ④ 解答用紙には、答案に関係のない語句・記号を書いたり、落書きをしてはいけません。
（問題冊子には書き込んでよい。）
 - ⑤ 誤ってマークした場合は、消しゴムできれいに消して書き直しなさい。
- 【8】試験終了後、問題冊子は持ち帰りなさい。

令和三年度 入学試験問題 (2期)

国語総合・現代文B

第1問 次の文章を読んで、後の問(問一～問七)に答えよ。

現代の大都市に生活していると、農業文明に戻るなどということは常識から言っても到底できそうにないことのように思える。実際にそれは世界史的な大きな視野から見ても真実で、一般に社会の中では商工業に従事する人間の数は時間と共に増加の傾向を見せ、比率において次第に農業人口を圧倒していく。

つまり社会の中では第一次産業(農業)から第二次産業(工業)へ、そして第二次産業から第三次産業(商業・サービス業)へと、産業の主力はほとんど①フカヒ的に移行していくのである。

日本の場合を例にとると、明治維新で近代化が始まった頃(19世紀後半)には人口の約7割が農業・漁業などの第一次産業に従事していたのだが、百年もするとそれはわずかに人口の3～4%に激減してしまっている。GDPの中に占める比率もだいたいその程度であり、そしてこれは日本だけの現象ではない。

この、産業が次第に第一次産業から第二次産業へ、第二次産業から第三次産業へ移行していくという事実は割合に古くから知られていたところであり、その最も古い指摘はウィリアム・ペティの「政治算術」(1690年)に記載されたものから始まっている。

それをとって、これは経済学の世界では「ペティ・クラークの法則」と呼ばれているが、ではなぜこのように農業は商工業との対決の中で敗退していくのだろうか。

この観点から近代以前の日本、特に徳川政権の経済というものを眺めてみると実に興味深い。それは農業文明が商業文

明の上に体ごと覆いかぶさってねじ伏せようとしたという、^ア世界史の中でもちよつと稀な^{まれ}实例ではなかつたかと思われるからである。

例えば銃器の発達を意識的に遅らせ、軍事的テクノロジーの進歩の針を一時的に逆方向に戻したという点でもこれは世界史上類のない文明だったが、このことをはじめとしてこの政権は、農業文明と商業文明の対決を知ろうとする者にとつては、世界史全体を見渡しても最も優れた教材である。

では経済面から見た時、徳川体制の最大の特徴が何だったかという点と、それはこの体制が米穀経済、すなわち米というものを建前上、主力貨幣として扱い、金銀を代用貨幣の地位に置いていたという点にある。

一見してかなり風変わりな経済システムだが、この政権、というよりその文明体制の基本設計というのは、要するに軍事力を独占した武士階級が、その軍事力によって社会的に商業階級を抑えつける力学構造にあり、そして彼ら武士たちの経済的基盤が、支配地域から収穫される米による年貢から成っていたということである。

では経済政策という点で、そのシステムを維持する上での最大の課題とは具体的に言つて一体何だったのだろうか。一言で単純化して言えば、^イそれは米の値下がり^①をいかにして防ぐかということに尽きていたと言つても過言ではない。それは以下の理由による。

武士階級の立場からすると、基本的に米の現物が手元にあるため、最低限餓死せずに生きていくことだけはとにかくできる。しかし彼らとて衣類や武具、建造物などの^②シウゼン、その他様々な製品やサービスなどは購入しなければならぬ。確かに一応は米が通貨という建前になっていたこの社会ではあるが、こういったものの支払いは、結局は金銭で行わねばならない。

そこで彼らは、徴収した年貢のうちのいくらかを市場に出して売却し、それを金銭に換えていた。だが彼らが現実に直面させられた問題とは、この交換を行う際の米の値段が時を追うごとに下がっていき、同じ量の米を売却しても、手に入られる金銭がだんだん少なくなってしまうことなのである。

やむなく彼らは国内では儉約に次ぐ儉約を行わねばならず、それでも不足する分については商人たちから大量の金を借りてその場をしのいでいた。そのため全国どここの藩でもその財政は累積赤字に悩んでいたのである。

この武士階級の窮乏化は、階級制度の崩壊、ひいては政権全体の倒壊を招きかねない。そのため徳川政権は躍りになって米価の下落を食い止めようとした。しかしながら結局のところ抜本的な対策を打ち出すには至らず、ペリー来航による外国からの軍事的圧力とそれが引き起こした内乱という、別の外的衝撃によって体制が瓦解するまで、この累積赤字は不治の慢性病として最後まで続くことになったのである。

これは単に幕府のやり方が下手だったというよりは、もつと遥かに本質的な問題によるものであり、農業という産業の持つ宿命的な弱点につきあわされた結果だと言える。一般的に洋の東西を問わず、農産物の価格というものは長期的に下落していく傾向にあり、生産物を安く買い叩かれて産業全体がだんだん儲からなくなってしまう。そのためこの産業に従事する人々の数は減ってしまうのである。

ではなぜ農業経済というものはそんなに無防備で脆弱なのだろうか。結論を一言で言えば、それは産業としての機動力の差にある。

物の価格を決めているのは、言うまでもなく需要と供給の関係である。例えばある品物の **A** が爆発的に沸き起こったにもかかわらず、それを下回る **B** しかなされない場合には、それは希少価値によって非常に高値がつく。逆に売れ残りが出るほど大量の **C** がなされて **D** をあまりに上回ると、品物は市場でだぶついて値崩れを起こしてしまう。

農産物というものは、明らかにこの点に弱点を抱えているのである。では一般的に言って、価格面で最も堅固な防衛能力を持っているものとはどんなものだろうか。

まずこの点で一番安定したものは、言うまでもなく需要も供給も一定のまま変化しないという性格を持ったものである。とにかく供給が一定でありさえすれば、それは一応安定した防衛能力を持っており、特に貴金属や土地などというも

のは、人間がどう努力してもなかなか量を増やせないという点で、その代表格である。

一方それに比べると、工業製品などというものはおよそそれとは正反対の性格を持っている。それを作れば儲かるということになる、我も我もと工場を建て始め、煙突からもくもく煙を吐いて大量の製品がベルトコンベアーから奔流のように流れ出て来ることになる。

そういった意味では、工業製品というものはすぐに過剰供給に陥って値崩れの危険に晒されやすく、あまり有利な立場にあるとは言えない代物はずなのである。それなのになぜ工業は不利な産業として衰退しないのだろうか。それは経済におけるもう一つの側面としての需要の面について農業と対比させるとはつきりする。

農業というものは、他の産業に比べて需要が本来あまり伸びないという特性を持っている。例えば収入が2倍になったからといって、人々はジャガイモやニンジンをいままでの2倍食べるようになるだろうか。農業の弱点というのは、実のところである。人間の胃袋の大きさに限度があつて、どう努力したところで人間は1日1トンのジャガイモを食べるようにはならないという現実が、その需要を固定的なものにしているのである。

それでいて、農産物というものは作付け面積を増やしたり効率を上げたりすることによって、供給はゆつくりとであるが増やすことができる。また他の製品分野なら、業者が供給を故意に減らして値段を釣り上げるなどということもできないではないが、食料不足の時に農民が故意に作物の収穫を減らして値段を^③ポウトウさせるなどということは、それが生存に欠かせないものだけに極めて難しい。

実際もしそのせいで、どこかの町で子供が餓死でもしようものなら、値段を釣り上げようとした農民は棍棒で殴り殺されても世間はあまり同情してくれないだろう。現在でも豊作の時に値崩れを恐れるあまり、大量のキャベツを畑で腐らせて処分するなどということは頻繁に行われているが、テレビの画面にそれが伝えられると、やはりショックを受けるものである。

それに比べると工業製品ならば、派手な宣伝を行うなどということをして需要を広げたり新しく作り出したりすること

が可能であり、まさに^工その一点において農業に対して圧倒的に優位に立つことができる。

そのため過剰生産による値崩れの危険が農業より大きいにもかかわらず、工業の側は機動性が一桁高い分、ある品物が値下がりして儲からないと見るが早いか、それをあつさり見限って撤退し、別の品物や別の市場を開拓してそこに主力を移してしまうのである。そして工業の持つこの特性は、商業においてはさらに増幅された形になっている。

つまり農業と商工業の対決においては、農業の側がほとんど伸びない需要と中途半端な速度で伸ばせる供給という、最悪のコンビネーションから成り立っているのに対し、商工業の側は、供給の伸びの速度が速すぎるといふ不利を抱えながらも、ゴムのように伸縮自在な需要がその不利をカバーしている。

このように機動性において勝る工業の側は、それを活かして不利な戦場からは素早く撤退し、攻め口を迅速に転換するということでも優位に立つてしまうのである。

ながはましんいちろう
(長沼伸一郎著『現代経済学の直観的方法』に基づく)

(注) ウィリアム・ペティ……一六三三—一六八七年。イギリスの医師、測量家、経済学者。

問一 傍線部①～③のカタカナを漢字に直し、【記述解答用紙】に記入せよ。解答番号は、①〈1〉・②〈2〉・③〈3〉。

問二 傍線部ア「世界史の中でもちよっと稀な実例ではなかったかと思われる」とあるが、筆者がそのように考える理由について、最も適切なものを次の①～④の中から一つ選べ。解答欄は、【マークシート解答用紙】ア。

- ① 徳川政権が、武士の軍事力拡大を防ぐため、銃器の発達を意図的に遅らせる政策を実施したから。
- ② 産業の主力が商工業から農業へ移るといふ他の国では見られない発展を遂げていたから。
- ③ 徳川政権が、産業の主力が農業から商工業に移行することを、意図的に防ぐための政策に注力したから。
- ④ 武士と農業従事者が協力関係を築くことで、商工業者の勢力拡大に対抗しようとしていたから。

問三 傍線部イ「それは米の値下がりをいかにして防ぐかということに尽きていたと言っても過言ではない」とあるが、筆者がそう考える理由として最も適切なものを次の①～④の中から一つ選べ。

解答欄は、【マークシート解答用紙】イ。

- ① 米の値下がりには、商工業者による過度の米の買い占めを招き、主力貨幣である米の流通が滞ることで武士や農民の生活が困難になるから。
- ② 米の値下がりには、武士の困窮化とそれによる軍事力の弱体化を引き起こし、外国の軍事的圧力に対抗することができなくなるから。
- ③ 米の値下がりには、武士の財政状況を悪化させ、軍事力で抑えつけていた商工業者から多額の借金をすることで、立場が入れ替わってしまうから。
- ④ 米の値下がりには、主力貨幣としての米の価値を損ねることになり、世界でも独特な経済システムが外国による金銀中心のシステムに乗っ取られてしまうから。

問四 傍線部ウ「産業としての機動力」とあるが、それはどのようなものか。最も適切なものを次の①～④から一つ選べ。

解答欄は、「マークシート解答用紙」ウ。

- ① 需要の変化にかかわらず、供給を増やすための技術力を継続的に高めていく能力。
- ② 価格面における防衛能力の高い土地をうまく活用することで、需要の変化に対応する能力。
- ③ 需要を意図的に作り出したり、需要のある部分に素早く供給を移したりする能力。
- ④ 伸び縮みする需要に合わせて、供給量を増加させる技術改良を行う能力。

問五 空欄 A ～ D に入る語句の組み合わせで、最も適切なものを次の①～④の中から一つ選べ。

解答欄は、「マークシート解答用紙」エ。

- ① A 需要 B 供給 C 供給 D 需要
- ② A 供給 B 需要 C 供給 D 需要
- ③ A 需要 B 供給 C 需要 D 供給
- ④ A 供給 B 需要 C 需要 D 供給

問六 傍線部エ「その一点」とあるが、商工業の持つ特徴との対比から、農業の特徴を端的にあらわす語句を本文中から十文字で抜き出し、「記述解答用紙」に記入せよ。ただし、読点や記号も字数に含めるものとする。解答番号は、(4)。

問七 筆者の論に近い考え方はどれか。最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

解答欄は、【マークシート解答用紙】**オ**。

- ① ペティ・クラークの法則には例外があり、徳川政権が行った政策について考察することで、農業文明が繁栄し続ける可能性を探ることができる。
- ② 農業文明が衰退する理由は、農業文明の衰退を意図的に食い止めようとした徳川政権の政策とその過程を概観することで明確にすることができる。
- ③ 日本において産業の主力が第一次産業から第二次産業、第三次産業へと移行した理由は、江戸時代の徳川政権による政策の失敗に起因しており、それを分析することで移行のメカニズムが明らかになる。
- ④ 徳川政権下で起きた貨幣経済の復興の事例を丹念に記述することで、ペティ・クラークの法則の妥当性を検討することができる。

第2問 次の文章を読んで、後の問（問一～問六）に答えよ。

毎年、梅雨があけると、私たちは、蒸し暑い日本の夏に打ちのめされる。といつても、それは悪いことばかりでもない。この蒸し暑さが稲の成長を助け、豊かな生態系をもつ日本列島をつくりあげた。日本の自然の力強さは、この蒸し暑い夏に支えられている。

日本の社会は、この自然とともに暮らした人々がつくりあげた。社会はけっして人間の力だけでつくられたものではない。自然と人間との共同作業がひとつの社会をつくりだす。自然と人間とがさまざまに関わりながら、その社会の特質をつくり、その社会の人々の精神をつくりだしていくのである。

とすると、日本列島に展開した社会は、どのような特質をもっているのだろうか。その特質は、今日の変わりゆく歴史のなかで、どんな役割や作用をはたしていくのだろうか。

ところで、これまで、日本人々の特質というところ、しばしば返ってくる言葉に、集団主義的性格というものがあった。しかし、私は、このように一面化してしまうことに疑問をもっている。というのは、私には、日本の伝統的な精神は、もつと多層的なものだったのではなかったか、という思いがあるからである。

日本にかぎらず、村落共同体であれ、職人や商人の共同体であれ、共同体の一員として暮らした歴史の記憶をもっている社会の人々は、人間は他者との関係のなかで生きている、という考え方をもっているものである。それは、けっして日本だけの特徴ではない。なぜなら、共同体のなかでは、自然や他の人々との相互的な協力関係をとおして、一人ひとりが暮らしてきたのだから。この点では、人間は相互関係を結んだ「集団」の一員として、現実の世界をつくりだす。

仮に、このような現実が生みだした考え方を「集団主義」と呼ぶのなら、私は、それが日本的な精神のなかに流れていることを、否定しようとは思わない。しかし、それだけなら、共同体の歴史をもっている人々に共通する精神であって、けっして日本的な特質にはならない。もしも伝統的な日本の特質に焦点をあてるのなら、私たちは、日本の風土が育んできた

徹底した個人主義、というもうひとつの精神をみなければならないし、「集団」の一員であることと、徹底した個人主義とが、矛盾なく共存してきた、精神の多層性を視野に収める必要があるだろう。

「W」
「、これもまた、伝統的な日本の精神である。ふと気がつくと、孤独な存在でしかない自分がみえる。しかもその自分の本性は、まもっているものをすべて剝がしてしまえば、無であり、空でしかない。この精神の先にあるものは、徹底した個人主義である。

日本的な精神とは、この個人主義的な心情と、共同体の一員として関わり合いながら暮らしている現実とが、矛盾しないところにあるのではないかと私は思っている。なぜ矛盾しないのかといえば、現実の世界に暮らす自分と、現実を超えた奥にある根源的な人間の存在とは、生きる次元を異にしているからである。その結果、共同体の一員として生きながら、同時に孤独に生きる自分を見つめるという、精神の多層性をもつことができた。

今日の日本の社会の問題点は、この伝統的な精神の多層性がわからなくなっていることである。個人主義も「集団主義」も、どちらもが、人間の存在とは何かをつきつめた結果生まれるものではなく、日常生活のなかの、単なる振る舞い方になってしまった。

日本的な精神は、半分の面に、深い個人主義をもっていたのではなからうか。だから人間が自分の利害で動く近代以降の時代がはじまると、この個人主義が表面的な世界で発揮されるようになり、日本は他の国々よりも強く、現実的な個人主義が社会を覆うようになったと私は考えている。

伝統的な日本の精神とは、^ア多層的精神という言葉に集約できるのではないかと私は思っている。もともと、このことは、これまで日本人の精神のあいまいさとして語られてきたことなのだけれど、それをあいまいさとしてとらえたのは、誤解だったのではなからうか。そうではなく、さまざまものを多層的に受け入れるところに、伝統的な日本の精神の特徴はあるのではないかと。

A、多くの人たちが宗教や信仰に対してとる態度にも、それを感じとることができる。私たちは、ときに仏教を

受け入れ、また各地の神々を受け入れるばかりか、道教や世界のさまざまな宗教までも、日々の暮らしのなかで受け入れる。なぜこのような、欧米人にはわかりにくい態度が生まれるのか。それは、日本人の宗教観があまりだからではなく、受け入れる「精神の層」とでもいうべきものが、それぞれ違うからである。つまり、精神のなかのある層で仏教を受け入れ、また別の層で神々の世界を受け入れるといったことが、自然におこなわれている、といってもよい。

個人と共同性の関係でも、同じような受け入れ方がなされる。日本の人々の精神の一方には、「W」という徹底した個人主義の精神があり、他方には共同体とともに生きる共同性を重んじる精神がある。この正反対に位置するふたつの精神が共存しえるのは、現実には生きていく世界では、共同体とともに生きる非個人主義的な精神を受け入れ、現実を超越した純粹な生をみつめるとき、人々は、一人で生きるしかない個人主義的な精神を手にしてきたからである。ここでも、このふたつの精神を受け入れる「精神の層」とでもいうべきものが異なっている。その結果、奥にX主義を秘めた、現実にはY主義的なZ主義が、日本では成立した。

考えてみれば私たちは、精神のある層では、合理的な考え方や論理的なものを受け入れながら、精神の別の層では、非合理的なもの、非論理的なものを受け入れている。受け入れる精神の層が違うから、それが矛盾をおこすことなく精神のなかで共存している。

伝統的な日本の精神の根幹をなす多層性は、精神を合理的知性に一元化してしまった近代人にとっては、わかりづらいものであったのだろう。だから、日本的な精神をあいまいなものとしてみる見方が生まれ、私たち自身も誤解してきたのであろう。

B、このような多層的な精神はなぜ生まれてきたのであろうか。私は、その根本にあるものは、やはり、日本的な自然と人間の関係ではないかと思っている。というのは、東アジアのモンスーン地帯に位置する、日本的な自然とともに生きることは、自然の多層性を受け入れながら生きる精神をつくりだすこと、でもあったからである。

自然は、一面では、人間が暮らしていくもつとも重要な基盤である。その意味では、自然ほどありがたいものはなかつ

たことだろう。ところが、この東アジアのモンスーン地帯の自然は、人間にとって都合のよいことだけを、してくれるわけではない。台風、豪雨、豪雪、さらに日本では大地震、噴火、津波——それらのものが、人々が長い時間をかけて築いてきた文明を、一瞬にして無に帰してしまうこともある。

C、日本においては、自然はありがたいものであると同時に、ときに暴力であり、人間にとっては恐怖でもあった。ところが、それらもまた、すべてが困りものなわけではなく、たとえば豪雪や洪水の後には、それがゆえに豊かな自然もつくられる。

この自然の多層性を受け入れていく暮らしが、伝統的な、多層的な精神をつくりだしていった基盤なのだと思う。だから自然と結びついた暮らしをやめたとき、多層的な精神も混乱するようになったのだ、と。

明治に入って近代化がはじまって以降、思想や文学のなかで、繰り返し議論されてきた課題が日本にはあった。それは「個人」という言葉にかかわることで、日本では近代的な個人が確立されていないのではないか、というような言い方がしばしばなされてきた。

D 私自身は、このような言われ方を聞くたびに、この議論は二重の誤解のうえに成り立っている、と思っていた。その誤解のひとつは、ヨーロッパの近代思想史を正確に学ばなかったところから発生している。ヨーロッパにおいても、理念として示された近代的個人と、実際に社会のなかで暮らしている個人は、つねにくい違っていたし、このくい違いをいかに克服していくかをめぐって、ヨーロッパの近代思想史は展開してきた。すなわち、欧米では個人が確立されており、日本では個人の確立が未成熟だというような通俗的な見解は、いつの間にかつくられた虚像だとしかいいようがない。

それが「個人」をめぐる第一の誤解だとすれば、第二の誤解は、日本の伝統的精神のなかには「個人」という考え方がない、という思い込みから生じている。そうではなく、現実の世界では共同の世界を重視し、人間の生をつきつめた世界では、個人として生きる人間をみつめるという精神の多層性が、日本の伝統的な特徴だったのではなかったか。

ところが、社会が近代化し、共同体的世界がこわれてくると、現実の世界のなかでは、伝統的で共同的な人間の存在の

あり方がわからなくなってくる。共に生きる世界に自分が存在するという感覚は薄れ、個人が生きる場として共同の世界もとらえられるようになる。つまり、共同の世界があつてこそ個人も生きているという感覚から、個人が生きる手段として共同の世界をとらえる感覚へと、変化していったのである。

この変化のなかに、近代化していく日本の屈折した個人主義が成立したのではないかと私は思っている。それは、自分の思うようにならない共同の世界を批判しながら、つまり自分の手段として機能してくれない共同の世界を批判しながら、たえず個人を主張していく個人主義である。その結果、逆に、共同的なものを、個人の目的を実現させる手段として利用しようとする動きも生まれてくる。どちらにしても、個人の利益以外のものはみえなくなっている。

ここに、きわめて個人主義的な日本の近代社会が形成されていったのであろう。そして、この変化を容易にした原因に、日本の伝統精神の一面であつた「個人主義」の変容があつたのではなからうか。日本の伝統的精神は、奥に強い個人主義をもっている。ただしそれは、現実に生きている世界で現れてくるものではなく、「W」といった、純粹に人間をとらえたときの超越的な世界での人間認識であつた。

ところが、現実がすべてであると考えた近代社会ができてくると、かつては超越的な人間認識であつた個人主義の精神も、現実の世界へと移つてきた。秘められた個人主義が、現実世界の個人主義として姿を現すようになったのである。

日本の近代史をふり返ると、多くの人々が、日本の人たちに個人の確立を求めてきた。ところが、他方で、日本の近代社会がもっているエゴイステックで個人主義的な性格に、少なからず批判をもちつづけてきた。このふたつの思いの狭間で、多くの人々が悩んできた。

この問題に対して、私は次のように考えている。日本の伝統的精神では、共同的な人間の存在と個人としての存在は、精神の多層性をもつことによつて並存することができた。ところが、社会の近代化とともにそれがこわれたとき、現世的な強い個人主義の社会をつくりはじめた。とすると、いま私たちは、日本的な風土と精神の関係にまで遡つて、この問題をとらえなおさなければならぬのではないかと。

(内山節著『里』という思想』に基づく)

問一 空欄 W には同じ言葉が入る。その言葉として最も適切なものを次の①～④の中から一つ選べ。

解答欄は、【マークシート解答用紙】 ア。

- ① 我思う、故に我あり
- ② つきつめれば、生きるも死ぬも吾一人
- ③ 人間は生まれながらにして平等である
- ④ 志士仁人は生を求めてもつて仁を害するなし

問二 傍線部ア「多層的精神」とあるが、筆者の論に沿った場合、なぜそのような精神が生まれたと考えられるか。最も適切なものを次の①～④の中から一つ選べ。解答欄は、【マークシート解答用紙】 イ。

- ① 社会が近代化し、共同的なものを批判しながら他方ではたえず個人を主張するという、日本の屈折した個人主義が成立したから。
- ② 共同体の一員として関わり合いながら暮らすことをやめたとき、秘められた個人主義が現実世界の個人主義として姿を現すようになったから。
- ③ 日本人の宗教観がいまいだからではなく、それぞれの宗教や信仰を受け入れる「精神の層」とでもいうべきものが違うから。
- ④ 日本人は、人間にとって都合のよいことだけをしてくれるわけではない多様な日本の自然とともに生きてきたから。

問三 空欄 A ～ D に入る最も適切な言葉を、次の①～⑦の中からそれぞれ一つずつ選べ。ただし、同じものを繰り返し使用してはならない。解答欄は、【マークシート解答用紙】 A ウ・B エ・C オ・D カ。

- ① なぜなら
- ② たとえば
- ③ しかも
- ④ そこで
- ⑤ ところで
- ⑥ もっとも
- ⑦ すなわち

問四 空欄 に入る言葉の組み合わせとして最も適切なものを、次の①～④の中から一つ選べ。

解答欄は、【マークシート解答用紙】。

- | | | | | | | |
|---|--------------------------------|-------|--------------------------------|-------|--------------------------------|-------|
| ① | <input type="text" value="X"/> | ∴ 非個人 | <input type="text" value="Y"/> | ∴ 共同 | <input type="text" value="Z"/> | ∴ 個人 |
| ② | <input type="text" value="X"/> | ∴ 個人 | <input type="text" value="Y"/> | ∴ 非個人 | <input type="text" value="Z"/> | ∴ 共同 |
| ③ | <input type="text" value="X"/> | ∴ 個人 | <input type="text" value="Y"/> | ∴ 共同 | <input type="text" value="Z"/> | ∴ 非個人 |
| ④ | <input type="text" value="X"/> | ∴ 非個人 | <input type="text" value="Y"/> | ∴ 個人 | <input type="text" value="Z"/> | ∴ 共同 |

問五 傍線部イ「社会の近代化とともにそれがこわれた」とあるが、筆者が「こわれた」理由をどのように考えているか。

次の①～④の中から最も適切なものを一つ選べ。解答欄は、【マークシート解答用紙】。

- ① 日本の伝統的精神の中には、結局のところ、個人としての存在を認める余地はなかったから。
- ② 日本の伝統的精神の中には、村落共同体の一員として暮らしてゆくのに必要な共同主義のみが存在していたから。
- ③ 日本の伝統的精神の中に存在していた秘められた共同主義が、現実世界に表面化してきたから。
- ④ 日本の伝統的精神の中に存在していた奥に秘めた個人主義が、現実世界に表面化してきたから。

問六 筆者の論に近い考え方はどれか。次の①～④の中から一つ選べ。解答欄は、【マークシート解答用紙】。

① きわめて個人主義的な日本の近代社会は、共に生きる世界に自分が存在するという感覚が薄れ、個人が生きる場として共同の世界をとらえる感覚が日本人の中に生まれたことから形成されていった。

② 人間は共同体の一員として暮らしているのだという感覚は、東アジアのモンsoon地帯に位置する日本的な自然とともに生きてきた日本人に固有のものである。

③ ささまざまな宗教や信仰を日々の暮らしの中で受け入れる日本人の態度は、断定的な態度をとらないことによって集団の和を保とうとしてきた日本人の精神のあいまいさに由来する。

④ 伝統的な日本の精神の中には、集団主義と個人主義の両者が矛盾なく存在しているが、その成立時期は、集団主義のほうが個人主義よりも早かった。

第3問 次の各問（問一～問六）を読んで、それぞれの指示に従って答えよ。

問一 次のA～Dの各文の傍線部のカタカナと、以下の①～④の傍線部のカタカナが同じ漢字となるものを一つずつ選べ。

解答欄は、【マークシート解答用紙】A ・B ・C ・D .

A きめがアラク質が劣る。 B 出身校の歴史をカエリみる。

① 話し合いが決裂してソ訟になる。

② 質ソな作りの小屋で生活する。

③ ソ雑な仕事はしたくない。

④ ひさしぶりにソ父母の家に行く。

① 他人の気持ちをコ慮する。

② 東京の歴史を懐コする。

③ 金融公コのあり方が問われる。

④ コ高の人生といわれる。

C 新規事業がトドコ₁オ₂ル。

D 砂糖を水にト₁カ₂ス。

① タイ岸の景色が美しい。

① 患者を病院に収ヨ₁ウ₂する。

② 避暑地にしばらくタイ在₁ス₂る。

② ヨウ₁求₂どおりに計画する。

③ 景気が後タイ₁シ₂ている。

③ 採ヨ₁ウ₂試験を受ける。

④ タイ₁惰₂な生活を送る。

④ ヨウ₁解₂するには時間がかかる。

問二 次のA～Dの各群において、漢字の読み方(カタカナ表記)が正しくないものはどれか。それぞれ①～④の中から

一つずつ選べ。解答欄は、【マークシート解答用紙】A ・B ・C ・D 。

① 誘致(ユウチ)

① 宵(ヨイ)

② 渦中(カチュウ)

② 礎(イシブミ)

③ 洞察(ドウサツ)

③ 漆(ウルシ)

④ 委託(イシヨク)

④ 志(ココロザシ)

① 含蓄(ガンチク)

① 雌雄(シユウ)

② 老翁(ロウオウ)

② 抽出(ユシユツ)

③ 膨大(バクダイ)

③ 愚痴(グチ)

④ 裁量(サイリョウ)

④ 累進(ルイシン)

問三 次のA～Dの慣用句で、に入る最も適切な名詞を、後の①～⑧の中からそれぞれ一つずつ選べ。ただし、同じものを繰り返し使用してはならない。

解答欄は、【マークシート解答题用紙】A ケ・B コ・C サ・D シ。

- A でかためる B がおけない C 口のにのぼる D 木でをくくる
- ① 鼻 ② 気 ③ 嘘うそ ④ 底 ⑤ 端 ⑥ 耳 ⑦ 火 ⑧ 草

問四 次のA・Bの各群で、熟語の成り立ち方が他と異なるものを、それぞれ①～④の中から一つずつ選べ。

解答欄は、【マークシート解答题用紙】A ス・B セ。

例 上下の文字が逆の意味を表しているもの……………善悪

上下の文字が似た意味を表しているもの……………上昇

上の文字が動詞で下の文字が目的語になっているもの……………読書

上の文字が下の文字を修飾しているもの……………高山

- A ① 愉快 ② 徒歩 ③ 秀逸 ④ 縦横
- B ① 疾風 ② 激流 ③ 乾杯 ④ 素材

問五 次のA～Cのことわざの意味として最も適切なものを、それぞれ①～④の中から一つずつ選べ。

解答欄は、【マークシート解答题用紙】A ソ・B タ・C チ。

A 上手の手から水が漏れる

- ① 繰り返し物事に取り組み姿勢が、成功への近道であるということ。

- ② 物事に対して無欲な人が、必ず成功するということ。
- ③ 消極的な気持ちで物事に取り組むと、必ず失敗に終わるということ。
- ④ 物事に巧みな人でも、時に失敗することがあるということ。

B 月夜に提灯ちようちん

- ① 風情があることのとえ。
- ② 効果があることのとえ。
- ③ 比べることができないうことのとえ。
- ④ 必要でないことのとえ。

C 木に竹を接ぐ

- ① 物事が調和しないことのとえ。
- ② 物事が急速に進むことのとえ。
- ③ 物事をありのままに捉えることのとえ。
- ④ 物事を上手く組み合わせることのとえ。

問六 次のA～Cの文意に合う四字熟語を、それぞれ①～④の中から一つずつ選べ。

解答欄は、【マークシート解答用紙】A ツ・B テ・C ト。

A 一度物事に失敗した人が再び全力で挑みかかること。

- ① 一世一代 ② 心機一転 ③ 捲土重来^{けんど} ④ 好機到来

B 何の根拠もないままに人の口から口へと伝わって、世間に広まっている噂^{うわさ}。

- ① 以心伝心 ② 異口同音 ③ 多事多難 ④ 流言飛語

C もどかしいこと。

- ① 疑心暗鬼 ② 隔靴搔痒^{そくよう} ③ 興味津々 ④ 紆余曲折^{うよくせつ}

〔国語の問題は以上です。〕

写真・資料等について

【一般選抜2期】

○選択科目 国語

- ・第1問 『現代経済学の直感的方法』長沼伸一郎著 講談社刊
- ・第2問 『「里」という思想』内山節著 新潮選書刊